俳ソサエティ」四半世紀の軌跡～まえがきに代えて

われらの「俳ソサエティ」という名の会合を立ち上げたのは、およそ四半世紀前の一九九八年（平成一〇年）のことである。とはいえ、それは到底「結社」と呼びうるようなものではなかった。正直なところ、この会合は、「俳ソの画像掲示板」というネット上の対話の場と、「新春句会」そしてごくまれな「吟行」がすべてというかなり雑ぱくな仲間であった。俳ソサエティの仲間は二つの共通点で結ばれていたといえるだろう。一つはその職域が国際関係論の「研究」分野であったこと、もう一つは「酒好き」という嗜好を共有していたことである。

特筆すべきことに、俳ソが長期にわたり存続できたのは、毛里興三郎（荒人）・和子（井静）さんが、ご自宅前に亭々たる欅林があるところから「欅里庵」という庵号までつけて小金井のご邸宅を句会の場としてご提供くださったことに負うところ大である。井静さんは現代中国研究の第一人者であり、二〇一六年「文化功労章」には皇居松の間で天皇（現上皇）ご夫妻に日中関係についてご進講もされた。こうした業績により、文化功労賞の栄にあずかられた。

学の粋講書初めや淑気満つ　　双掌

ご夫君荒人さんは、定年後は一念発起され東京外大で「アラビア語」の習得に挑まれた由。俳号は、かの魔法のランプを駆使するアラジンに因むとお伺いしている。もう一つ、わが俳ソサエティが飲み会と渾然一体をなしてきたことに関し、遠路石和からこれを盛り上げる鍋の材料（大量の野菜・肉・魚介、自家製ワイン紅白各一升）をご提供いただいた笠原輪院さん申山ご夫妻にも謝意を以って言及せねばなるまい。そもそも、ぶどう園を取り仕切るなどという作業は輪院さんだからこそ可能なものの、軟弱な我らには想像もつかぬ世界で、ひたすら感謝の意を持って痛飲・痛食（という単語があったっけ？）するばかりであった。

その夫君申山氏については二つの点に触れておきたい。ご専門は中国近現代史で南京事件にご造詣が深い革新派の研究者である。氏の俳句そのものは一種独特な雰囲気――いわば申山ワールド――を帯びており、折々思いもよらぬ「字余り句」をものされる。いわく、「少し早めに読めば字余りとは感じなくなるもの」だそうな。とはいえ、氏は地元で短歌サークルにも参加して研鑽を積んでおられるし、最近、『第一句集　立葵』（本阿弥書店、平成三〇年）を刊行されてもいる。いわば本格的な歌人にして俳人なのである。

前述のように、俳ソサエティに集ったのは主として日本国際問題研究所・国会図書館・参議院事務局などに所属する虎ノ門・霞ヶ関周辺の国際関係理専門家・研究者であったため、われらの句が「社会的事象」に傾斜するという傾向が避けがたかった。いわく、不況・戦争・選挙などなど。それでも、われらは句会」には十分に乗り気で、一九九四年の立ち上げいらいほぼ二五年にわたり連続して実施してきた。もっとも、顔をそろえるとまずは鍋を囲み、酒を酌み交わし、ひとしきり雑談に興じるのが定番で、なかにはこちらを目的に集ってきた諸氏もあったことは間違いない。公平にいって、飲み会の一形態としての句会というのが正確であったろう。

その意味で、忘れ難いこととして、仲間の三名もが【アルコール依存症】とその延長線上で天寿を全うすることなく早逝されたという悲劇をあげねばならない。このお三方はいずれ「日本国際問題研究所」の同僚でもあった。その一人が、秋田出身の佐藤榮一（秀峰）氏、もう一人が山形出身でこのシンク・タンクの出版課を担っていた斉藤修（修風）氏、そして長野県出身の玉木一徳（泰山）氏である。

俳句という点では、修風氏が一段高みにたっており、とりわけ

茶屋忙し天橋立走り梅雨　　**修風**

わが村に誇るものなし蟬時雨　　**同**

の二句は深くわれらの記憶に残っている。

他方、人間的にもっともインパクトが強烈であったのは佐藤秀峰さんであった。かれの人となりについては「日本国際政治学会」の同僚諸氏にもその酒豪ぶりで名を馳せていた。かれが急逝されたのは二〇〇一年三月一五日のことであった。

群れ飽きて一羽離るゝ寒雀　　**双掌**

秀峰さん逝去から半月後の四月四日には、故人がこよなく愛していた武蔵野・平林寺で追悼句会を催した。

この句会での高得点句は以下の三句であった。

花筏漕いで彼岸に着けるやら　　**嗚呼晴（一四点）**

花に酔ひ酔ふて人恋ふ師でありき　　**双掌（一三点）**

俺ここぞ若葉ゆすりぬ平林寺　　**輪院（五点）**

三人目の玉木氏は、悲しむべきことにご家庭の不和を口実に酒浸りとなった恨みがあり、天寿を全うし得ずに早逝されたのである。

鍋の座の一人欠けたる広さかな　　**双掌**

われらの句会では、毎回参加者の互選による得点で「天・地・人」三賞を選んできた。以下には、一九九四年の第一回句会以降の全句会と、各会での兼題および最高得点句のみを示しておこう。

一、一九九四年一一月一九日（投句形式）すすき・鰯雲
佐藤東峰（のち「秀峰」）　長雨に訪う人もなく萩の花

二、一九九五年八月五日　（榉里庵）蝉しぐれ・花火
黒柳双掌　みちのくの無人の駅の蝉時雨

三、一九九六年一月二七日（平河会館）湯豆腐・氷柱
黒柳双掌　悪たれがぐいともたげし初氷

四、一九九六年九月二八日（青学会館）秋刀魚・コスモス・夜なべ
斉藤修風　コスモスの咲き放題の過疎の家

五、一九九八年七月一一日（一碧湖・稜光倶楽部）冷や奴・手紙
櫻川明陽　紫陽花の押し花ありし古手紙
黒柳双掌　なつかしや母かなくぎの夏見舞い

六、一九九九年二月二〇日（榉里庵）初春・寒雀
玉木泰山　かまくらに紅蝋燭のゆらぎかな

七、一九九九年一二月一八日（忘年句会）落ち葉・鍋
佐々瞬河（のち「みほ女」）　子らの声吸ひて幾年鍋のひび

八、二〇〇〇年八月二日（榉里庵）昼寝・風鈴
黒柳双掌　打ち水に老舗暖簾の藍冴えて

九、二〇〇〇年一一月二五～二六日・パストール下呂）旅・宿・道・
稲葉嗚呼晴　薄紅葉地蔵尊の頬染めて

一〇、二〇〇一年一月六日（榉里庵）
黒柳双掌　父傘寿頑固一徹味噌雑煮

一一、二〇〇一年四月一四日（平林寺「むさし野」）佐藤さん追悼
稲葉嗚呼晴　花筏漕いで彼岸に着けるやら

一二、二〇〇二年一月五日（品川・船宿平井）嘱目
黒柳双掌　棲み分けて海鵜ばかりや凍て干潟
小田川若水　みぞるるや一羽一羽の川鵜かな

一三、二〇〇二年九月一五日（別所温泉・玉屋旅館）鱗雲・秋風
玉木泰山　画学生戦に散りぬ秋古刹
笠原山猿（のち「申山」）　無言館妻を描きて逝きし秋

一四、二〇〇三年三月二九日（石和温泉・糸柳）花便り・風光る・春愁
宮本審亭　引鴨の発ちし水面や風光る
櫻川明陽　色も香も昼に勝りて梅月夜

一五、二〇〇三年一〇月一一日（湯檜曽温泉・もちや旅館）
櫻川明陽　登るほど色めかしけり山紅葉

一六、二〇〇四年一月一一日（榉里庵）雑煮・除夜の鐘・賀状
笠原輪院　鏡餅ふつと笑みする道祖神

一七、二〇〇四年三月二七～二八日（真鶴・味豊）磯遊び・霞
黒柳双掌　遠霞けふの宿りはあの辺り

一八、二〇〇四年一〇月二三～二四日（湯野浜温泉・海音閣）夜寒・月
毛里井静　庄内に台風一過捨案山子
嵯峨紫文　月白く風唸り上ぐ出羽の浜

一九、二〇〇五年一月一八日（榉里庵）初・寒
山際栗毬　老夫婦雪の平坂にじりゆく

二〇、二〇〇五年三月二六日（浅草屋形船・野田屋）蒲公英・隅田川
黒柳双掌　うらゝかや江戸裏店の眠り猫

二一、二〇〇五年一〇月一五日（裂石温泉・雲峰荘）秋草・虫
毛里井静　秋草の彼方は富士か峠道

毛里荒人　虫の音や夜陰の底に命あり
嵯峨紫文　ひからびし虫の骸を雨送る
二二、二〇〇六年一月九日（樺里庵）新年・寒月
黒柳双掌　寒月に菟を見しはいつのこと
二三、二〇〇六年三月三一日（喜連川吟行）花便り・昭和
毛里井静　古桜にいにしえ人の声聞かむ
二四、二〇〇七年一月八日（樺里庵）初夢・七種粥
毛里荒人　行き過ぎて戻れば冬の桜かな
二五、二〇〇七年四月二八日（武蔵野吟行）藤
毛里井静　国を分く寺廟を越えて黄蝶かな
二六、二〇〇七年一一月一七日（石和温泉）小春・蜜柑
佐々みほ女　子を膝に蜜柑むく日の遠かりし
二七、二〇〇八年一月六日（樺里庵）寝正月・団欒
毛里井静　歳めぐり獅子舞の子の逞しく
二八、二〇〇九年一月一一日（樺里庵）初場所・寒稽古
宮本賽亭　正座する母の背丸し福寿草
二九、二〇一〇年一月九日（樺里庵）三ヶ日・除夜の鐘
黒柳双掌　膝の子にまた吹いてやる薺粥
三〇、二〇一一年一月八日（樺里庵）お年玉・木枯し
笠原申山　木枯の掃き清めたる星の天
三一、二〇一一年一〇月一日（石和温泉・君佳）案山子・夜長
毛里井静　百体の仏の笑みや乱れ萩
三二、二〇一二年一月七日（樺里庵）雑煮・除夜の鐘
毛里荒人　家々の歴史をつなぐ雑煮かな
三三、二〇一三年一月六日（樺里庵）初句会・初場所
小田川若水　初場所や桟敷彩る艶姿
三四、二〇一四年一月一三日（樺里庵）初景色・絆
黒柳双掌　母見舞ふ遠き家路や初景色
三五、二〇一五年一月一二日（樺里庵）雑煮
櫻川明陽　一瞬の切っ先あがり寒稽古
三六、二〇一五年七月九日（金沢・すみよしや旅館）雲の峰・冷や奴
櫻川明陽　加賀言葉これも一品夏座敷
三七、二〇一六年一月九日（樺里庵）買初・淑気
小田川若水　淑気満つ神話の島に波静か
黒柳双掌　荒行に裸形犇めく淑気かな
三八、二〇一七年一月一五日（樺里庵）数へ日・初場所
毛里井静　数へ日や異国に逝きし友偲ぶ
三九、二〇一八年一月二一日（樺里庵）初日記・達磨市
櫻川明陽　すずやかな赤子のまなこ福だるま
四〇、二〇一九年一月一四日（樺里庵）寒稽古・三寒四温
稲葉嗚呼晴　菜園の四温のバケツ薄氷
櫻川明陽　指呼の間四島(しま)も三寒四温かな
四一、二〇二〇年一月六日（樺里庵）初日記・小正月
佐々みほ女　初春やただ居ることの有難し

俳ソサエティについて最後に特記すべきは、当方の晩年においても忘れ難い記憶となった「新型コロナ・ウイルス感染症」（ＣＯＶＩＤ１９）のこと。二〇二〇年早春に「ダイアモンド・プリンセス」という豪華クルーズ船の乗員乗客が集団感染（いわゆる「クラスター」化）したあたりを発端とするＣＯＶＩＤ１９禍は、三つの波を形成しつつ、三十万余の感染者を生み、政府・国民を前代未聞の苦境に陥れた。政府は、二度にわたって「緊急事態宣言」（いわば戒厳令）を発し、飲食店の営業自粛、国民の外出自粛を求め、懸命に感染拡大の抑制を図った。企業や学校ではインターネットを利用した「テレ・ワーク」や「遠隔授業」が推奨された。かくして、わが俳ソサエティでも一九九〇年代央より吉例となってきた「新春句会」の開催を自粛せざるを得なかった。

当時急速に浮上してきた「ＺＯＯＭ」という遠隔ミーティングのツールを活用して「新春ＺＯＯＭ句会」案が浮上し、現役教授の稲葉鳴呼晴さんがホスト役となって、リハーサルを挙行して実現性が確認され、二〇二一年一月二三日（土）午後二時、俳ソ史上初のＺＯＯＭ句会が実現され、毛里荒人・井静、笠原申山・輪院、櫻川明陽、稲葉鳴呼晴、佐々みほ女、安倍きみ女、および当方の九名が参加した。

初日記・古日記・団欒を兼題とする新春ＺＯＯＭ句会での最高得点句は佐々みほ女さんの

読まぬまま棺へ夫の古日記　　みほ女

で、天3票、選2票の計11点を獲得した。さらにみほ女さんは

来し方はつづら折りなる老いの春　（4票）

コロナ禍に逝く人あまた冬銀河　（3票）

このＺＯＯＭ句会は、一堂に会し、酒を汲み、鍋をつついての恒例の句会とは似ても似つかぬ雰囲気ではあったが、俳句をめぐる論議は存分に盛り上がり、会員諸氏の「俳句への姿勢や俳句をめぐる考え方」を浮き彫りにする機能を果たした。とくに記憶に残るのは「隠れ俳号辛辣」の名を頂戴している申山さんが、歯に衣着せぬ切り口で多くの出句に鋭い批判を展開したこと、櫻川明陽さんが、季語をめぐって厳格な姿勢を堅持したこと、そして、毛里荒人さんが、年の功ともいうべき「いぶし銀の人生観」を反映した俳論を展開したことなどである。

もう一つ、安倍きみ女さんが、出句に際し、今は亡き佐藤秀峰さんの感想として「やはり俺の句が一番だなぁ…」というセリフに同感を表明されたことも心楽しい記憶である。ＺＯＯＭ句会の末尾には、今後四季ごとにＺＯＯＭ句会を開催することが合意されたのも、会員諸兄姉が今回の試みに満足を覚えたことの証であるとはいえ、やはり俳ソサエティ句会の醍醐味は武蔵野「欅里庵」での和気藹々たる雰囲気に留めをさす。来年はＣＯＶＩＤ１９が終息し、対面での句会が開催できるよう切望したものである。

こうした対面での句会が実現したのは、新型コロナ禍がおおきく沈静した二〇二三年の「井の頭公園吟行」においてであった。その折りの三賞受賞句は以下の通り。

湧水に黄葉ひとひら舟となる　　明陽

木漏れ陽や手彫りの歌碑に小さき秋　　双掌

色変へぬ松を背に立つ弁天堂　　きみ女

最後に、草創期に会員として名を連ねられたが、次第に疎遠になっていたった方々に言及しておきたい。

山極晃（栗毬）　中国近現代史家（故人）
【花も見ず酒杯も干さず友逝けり】
中村平治（空桶）インド政治研究者（故人）
【初春やガンガーの水清からず】
加茂雄三（薫山）ラテンアメリカ史学者（故人）
【歴史あり四条河原の枯れすすき】
小田英郎（霧岳）アフリカ研究者
【ザンベジの芒穂ゆれて象の影】
宮本武夫（賽亭）参議院事務局
【すすき葉を飛ばし競ひし日を想ふ】
山本武彦（山彦）早稲田大学名誉教授
【初めての出会いも和む花火の輪】
志鳥學修（鹿山）武蔵工業大学教授
【涼しさを花火に映し妻の顔】
嵯峨隆（紫文）静岡県立大学名誉教授
【戻りたる賀状無沙汰を責むがごと】
小田川興（若水）朝日新聞社論説委員
【還暦の年酒温め独り坐す】

このように、旧知の間柄で多士済々なメンバーによる句会は、和気藹々として笑顔が絶えない場でありながら、相互批判となると歯に衣着せぬ丁々発止・侃々諤々たる論議が展開されてきたのは自然の流れであった。

荒人・井静ご夫妻は本句会の最長老で、「老成した感」のある句をものされるが、されるが、ご夫妻の間に相通ずるものがおありなのか、何らかのテレパシーの働きか、選句において相互の句を取られることも少なくなかった。

次いで申山・輪院のお二方には、日常生活上の齟齬のようなものが覗えるような掛け合いを聞かせていただいたが、輪院さんの献身的なブドウ園経営への姿勢への感謝の意が荒人さんの出句に余すところなく表され、両者のギャップに多くの句友の笑いを誘ってきた。

頑健な身体の持ち主明陽さんは「参議院調査会」というご経歴を反映してか内外時事を描いた句も多いが、季語の世界にも造詣深く、キラリと光る句をものされてきた。

みほ女さんは、ご高齢のお母上・叔母上の介護に努めておられると聞くが、出句にもしばしば母上が登場される。自然体でフェミニンな香りある句を詠まれる。

きみ女さんは旅行・寄席・くずし字など多趣味な女性でありながら、その句は気っぷの良い、いなせで、まさに「竹を割ったような」雰囲気を感じさせる。

嗚呼晴さんは、句会でただお一人の現役(名城大学教授)で、頻繁に海外調査のため世界を駆け回っておられるため、句会への出席は残念ながら少なめである。

最後に恵寿さん。

このように多士済々なメンバーによる句会が、和気藹々として笑顔が絶えず、しかも時に辛辣で丁々発止・侃々諤々の論議に満ちていたのも自然の流れであった。望むらくは、句友諸兄姉にとっても貴重で至福の時間であったと信じたい。

ちなみに、この句集のタイトルを「山葵」としたのは、わが句会に侘び・寂びの感興に満ちたものであれとの願いを込めたものである。

【双掌記】

【　春　】

旅立ちの初志堅かれと春寒し

師は見ずや麻布に落花盛んなり

春霞けふの宿りはあの辺り

春炬燵女房殿の鼻眼鏡

春雷に急かるゝごとき別れかな

かねて聞く常春慕ふ旅出とや

うらゝかやこともなげなる癌告知

惜しきまで百花咲きつぐ四月かな

花菜和へ伊万里に盛りて贅となす

水温む男もなせや厨事

【夏】

今年また花ある旅の立夏かな

七夕や孫の短冊逆さ文字

技語る飛騨の匠の額の汗

球児らの汗泥涙清々し

兄の霊今どの辺り雲の峰

濁世への天の怒りか暴れ梅雨

梅雨晴れ間露地に繰り出すもへじかな

朝市に鳴らす宿下駄浴衣がけ

湯の街の軒低く飛ぶ初燕

色恋を忘れて久し冷や奴

【　秋　】

雲間なる秋天の色たゞならず

濃淡に車窓過ぎゆく稲田かな

喰ふて寝るのみの病棟夜長し

潮騒に問ふて問はれて暮れ早し

杉玉や旅の昼酒許されよ

天高く白雲微風何不足

世を拗ねて蟷螂群れを作らざる

故郷を忘れたるかと柿熟るゝ

孫招き影踏みしたき良夜かな

予後の身を踏み出す街の残暑かな

【　冬　】

群れ飽きて一羽離るゝ寒雀

悪餓鬼がぐゐともたげし初氷

己より若きも逝くや冬深し

寒月に菟を見しはいつのこと

美濃寒し円空仏の鉈の冴へ

妻病みてひとつ覚へのおでん鍋

遠富士の威儀に寄り添ふ寒夕焼け

冬日影猫背の癖を曝しけり

懐手何も思はず何も見ず

湯たんぽや寝床に書斎居間厠

【　新年　】

数え日や明窓浄机整はず

荒行の裸形犇めく淑気かな

初暦まず医通いの丸印

三河人頑固一徹味噌雑煮

聞くのみとなりて久しき除夜の鐘

夢問はゞ酔ふて半眼寝正月

屠蘇に飽き茶房に憩ふ至福かな

買い初めや泥つき葱の深緑

道すがら唱へて来しか孫の賀詞

小さき夢ゆゑに小さき福達磨